

『天の国は近づいた』井上隆晶牧師
エレミヤ16章14～17節、マタイ福音書4章12～22節

①【死の陰の地に光が差し込む】

ヨハネの大洗礼運動は民衆にはすごい人気がありましたが、中央にいる支配者たちにとっては混乱を招く運動でした。そんなヨハネがヘロデ王に捕らえられ牢屋に入れられてしまいます。こうしてヨハネの活動は終わりを告げます。イエス様は身の危険を感じてガリラヤに退いたのではなく（ガリラヤもヘロデの統治下にあった）、ヨハネの使命が終わったことを知って、ナザレの田舎からガリラヤ湖畔のカファルナウムの町に来て住まわれたと思われます。ヨハネの活動が終わるとは「律法」の時代が終わるという事です。律法の役目とは、私たちに「あなたは病気です」ということを教える健康診断のようなものであって、医者であるキリストの元へ行くように私たちに勧めます。律法を読む読み方に気をつけなければなりません。

●先日、ある牧師とLGBTQのことで論争しました。その人はLGBTQは罪だと言うのです。ローマ教皇フランシスコが「神はあなたをそのように造られた。恐れてはなりません。元気を出して生きなさい。」と言った。それはおかしい。そんなことをトップの人が言うものじゃあない、というのです。私はその教師に「あなたは勉強をしたのですか？そのような人と関わったことがありますか？」と聞きました。私はそのような人たちに言いたい。「あなたは旧約の律法と掟を完全に守っていますか？守っていないなら律法を破ったことになります。」あなたも同じ罪人です。自分が律法を破っておりながら、他人を裁くのですか？

ユダヤ人たちは、律法を読んで「自分たちは戒めを守っているから健康だ。外国人たちは罪人だ」というように、自分の正しさを証明する為に読んだのです。律法で生きる者は、一つの戒めを破っても有罪となります。律法を自分を正当化するためや、人を裁くために用いてはなりません。未だに律法に囚われている教師が多いのです。

14～16節に「それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。『ゼブルンの地とナフタリの地、湖沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、異邦人のガリラヤ、暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。』」とあります。これはイザヤ書9章1節からの引用です。イエス様はガリラヤ地方を伝道の拠点としました。エルサレムには神殿があり、祭司、聖書学者も大勢います。それなのになぜ、エルサレムではなくガリラヤ地方で活動されたのでしょうか？カファルナウムは外国に近いので、新しいことを常に取り入れる町でした。そうしなければ生きていけなかったからです。守りではなく、改革の町でした。エルサレムの大都市に住む民は、自分たちこそ本物、正統派だと自負していました。「自分は変わらなくても良い、お前たちが我々に合わせろ」と思

って生きていました。彼らから見たらガリラヤなどは異端者が集まる場所であり、無秩序の町でした。正統派から見たら「暗闇の地、死の陰の地」でした。しかし、そこにこそ神の光は昇り、神の光が照らすのです。そういう所でこそ神の働きは現れます。エルサレムが豊かさと栄光と繁栄と高学歴の象徴なら、ガリラヤとは貧しさと弱さと無知と罪の象徴です。私の経験では、大きく、豊かになると神の聖霊と神の命は去ってしまうように感じます。貧しい時、小さい時、弱い時の方が神の命は溢れているように思います。小ささと弱さと貧しさを恥じてはいけません。都島教会もガリラヤの一つです。

②【悔い改めるとは】

17 節に「その時から、イエスは、『悔い改めよ。天の国は近づいた』と言って、宣べ伝え始められた。」とあります。マルコ福音書では「時は満ち、神の国は近づいた。」(マルコ 1:15) と書かれています。宣教するには神の「時」があるということです。この世は神の意志によって創造されました。初めがあり、目的があって創造されました。世界は完成へ向かって今も進んでいます。時間は同じことの繰り返しのように見えますが、この世の時間と神の時間は交わったり、離れたりしながら前に向かって進んでいます。私たちはこの世にあって「神の時間」を大事にしたいと思います。これは永遠に続く時間であって、神と交わるこの礼拝の時がそうです。旧約聖書のヘブライ語の時制は「完了形」と「未完了形」しかありません。神の言葉は成ったか、まだ成っていないかです。そして神の言葉は必ず成りますから、私たちは希望があるのです。私たちは神と交わりながら、その神の計画が成就する証人となるのです。

イエス様は「天の国は近づいた」と言われました。「天の国」と「神の国」とは同じ意味です。私たちは「天の国は近づいた」と聞くと、地上にもうすぐユートピア(理想郷)ができると思ってしまうのですが、そういう意味ではありません。天の国・神の国とはイエス様自身の事です。彼の愛と力と支配が神の国であり、彼の言葉が神の国の法です。イエス様を受け入れれば、神の国はあなたの心の中にできますが、受け入れなければあなたの真横に来ているだけで終わるのです。ですから「近づいた」と言われるのです。あなたのものとなるかは、あなたの意志次第です。「悔い改めて」とありますが、ヘブライ語では懺悔という意味ではなく「方向転換する」という意味です。キリストの方に自分の向きを変えるのです。キリストの言葉に自分を合わせるのです。絶えずキリストに帰るのです。それが悔い改めです。だから悔い改めは一生続きます。キリストから離れない事です。

③【わたしについてきなさい】

18 節以降は四人の漁師を弟子にする物語です。ペトロとアンデレは湖で網を打って漁をしており、ヤコブとヨハネは舟の中で網の手入れをしていました。イエス様はどちらの兄弟も二人セットで「わたしについてきなさい。人間をとる漁師にしよう。」(19 節) と言って呼ばれました。「二人はすぐに」(20 節)、「この二人も

すぐに」(22 節) と二人という言葉が繰り返されています。人は一人で生きるものではありません。信仰も一人でするものではありません。そのように人は創造されているからです。人は人の中で育ちます。しかし家族、親戚といった血縁ではなく、神に呼ばれた者同士としての新しい交わり、新しい家族、新しい兄弟姉妹として生きるように召されたのです。

「湖で網を打っているのを御覧になった」(18 節)「網の手入れをしているのを御覧になると」(21 節) と「御覧になる」という言葉が繰り返されます。神は人を見ておられます。そしてある人を呼ばれます。始まりはいつも神の方です。どんな宗教でも人間が神を捜し求めますが、キリスト教は神の方が人間を捜し求めています。その神の愛の語りかけ(愛の眼差し)を知り、応答するのが信仰です。

●2 世紀のリヨンのエレナイオスはこうっています。「神との友情は、それを得る人に不滅性を与える。初めに神は人間を必要としたからではなく、自分の恵みを注ぎ込む相手を得ようとしてアダムを形造られた。…主がご自分について来るようにと命じたのも、私たちからの奉仕が必要だったからではなく、私たちに救いを与えようと言われたからである。救い主について行くことは、救いにあずかることであり、光について行くことは光にあずかることだからである。光のうちにある人々は、自分が光を照らし出し、輝かせるのではなく、光から照らし出され、輝かされるのであって、自分たちは光に何も与えず、光から恵みを受け、照らし出されるのである。神に従うことも同様である。…神は、仕え従う人々に、いのちと不滅性と永遠の栄光を分け与えられる。…神は完全な方であり、欠けるところがないからである。…神が何も必要とされないのとは対照的に、人は神との交わりを必要とするからである。神への奉仕を貫くこと、やめないこと、これこそ人の栄光である。」

金曜日に「大聖水式」をし、旧約聖書から水に関する箇所を 13 か所読み、聖水を作りました。その中にマラの水は苦くて飲めませんでした。一本の木を投げ込むと、水が甘くなったという箇所がありました。その所で主は「わたしはあなたをいやす主である。」(出エジプト 15 : 26) と言われました。いい言葉だなと思いました。繰り返し何度も言いましょ。

●TV のコマーシャルで、地球の下に、小さな水の球体がある映像が流れていました。地球上の水の量は、これだけですよ！というのです。地球の体積の 0.13% です。海は広いし深いのもっとあると思っていたのですが、たったそれだけです。天地創造の時からこの水の量は変わっていません。個体(氷)、液体(水)、気体(雲)に変化して地球上を今も覆っています。この水がなければ生物は生きれないのです。すごい創造の業だと思います。この水を神は支配され、救いといやしの道具として用いられます。聖水を飲んで、主にいやしていただきましょ。

「わたしはあなたをいやす主である。わたしについて来なさい。」と今日もイエス様は言われます。イエス様についてゆきましょ。何があっても、どこまでもイエス様を信頼してついてゆきましょ。